

サードプレイス概念の先行研究の検討

—実践共同体との関連についての考察—

松 本 雄 一

要 旨

本論文では、「サードプレイス (third place)」概念がどのように用いられ、またこれからどのように用いられるのかという点について、先行研究の検討をもとに考察する。あわせて実践共同体 (communities of practice) との関連性、および双方の補完性、応用可能性についても考えていく。サードプレイスについて Oldenburg (Oldenburg & Brissett, 1982; Oldenburg, 1989) は、仕事や家庭とは別の、地域住民の会話によってくつろぎや安らぎを得る場であり、家庭、仕事、そして「広く社会的な、コミュニティの基盤を提供すると共にそのコミュニティを謳歌する場」という3つの経験の領域のバランスを実現する、「インフォーマルな公共生活の中核的環境」としている。Oldenburg のサードプレイス概念は抽象度が高く、様々な概念を包含しうるが、逆にそれは概念の発展可能性もあると考えられる (松本, 2017)。他方でサードプレイス概念が「第3の場所」というスタンス的なメリットのみ強調され、概念的に十分発展していないのが現状であるともいえる。

そこで本論文では、サードプレイス概念の先行研究のレビューを行うことで、現在サードプレイスがどのように用いられているかを検討する。その上で本論文の目的は、サードプレイス概念と実践共同体概念の理論的接近を試みることである。

キーワード：サードプレイス (third place)、実践共同体 (communities of practice)、事例研究 (case study)、オンライン (online)、学習 (learning)

I はじめに

本論文では、「サードプレイス (third place)」概念が先行研究でどのように用いられ、またこれからどのように用いられるのかという点について、先行研究の検討をもとに考察する。あわせて実践共同体 (communities of practice) との関連性、および双方の補完性、応用可能性についても考えていく。松本 (2019) において実践共同体は、その目的を学習を第一義とする、「学びのコミュニティ」であるとした。それは実践共同体の概念的広さが、過度の適用可能性をもち、多様な概念を過剰に包摂する状態になることを危惧し、概念の厳密性を一定程度確保するという意図があつたのであつた。そのねらいは研究面においては一定の効果があつたと考えられるが、これを実践面においてもっと活用可能なものにする上では、実践共同体の難解なイメージ、および概念の狭さが阻害要因になる可能性もある。

対してサードプレイスについて Oldenburg (Oldenburg & Brissett, 1982; Oldenburg, 1989) は、仕事や家庭とは別の、地域住民の会話によってくつろぎや安らぎを得る場であり¹⁾、家庭、仕事、そして「広く社会的な、コミュニティの基盤を提供すると共にそのコミュニティを謳歌する場」という3つの経験の領域のバランスを実現する、「インフォーマルな公共生活の中核的環境」としている²⁾。Oldenburg のサードプレイス概念は抽象度が高く、様々な概念を包含しうるが、逆にそれは概念の発展可能性もあると考えられる (松本, 2017a)。それは組織における学習 (長岡・橋本, 2021) やキャリアデザイン (松本, 2021) といった幅広い分野にわたる。他方で、サードプレイス概念が「第3の場所」というスタンス的なメリットのみ強調され、概念的に十分発展していないのが現状であるともいえる。

そこで本論文では、サードプレイス概念の先行研究のレビューを行うことで、現在サードプレイスがどのように用いられているかを検討する。その上

1) Oldenburg (1989: 邦訳)、49-56ページ。

2) Oldenburg (1989: 邦訳)、56-63ページ。

で本論文の目的は、サードプレイス概念と実践共同体概念の理論的接近を試みることである。

II サードプレイス概念について³⁾

Oldenburg (Oldenburg & Brissett, 1982; Oldenburg, 1989) が提唱する「サードプレイス (the third place : 第三の場所)」という概念は、実践共同体にとって多くの示唆をもたらすものである。それは Wenger et al. (2002) が「アイデンティティの拠り所 (home of identity)」と表現したように、その居心地の良さをもった交流の場所は、実践共同体にとって不可欠ともいえる要素であり、既存の実践共同体研究にとっても重視されていない部分でもある (松本, 2019)。Oldenburg の主張をしっかりと吟味することで、実践共同体論をより正確に、より発展的に拡張することができるであろう。

サードプレイス概念を最初に提唱した Oldenburg & Brissett (1982) においては、サードプレイスが提唱される背景として、個人の生活の質 (QOL) の低下がとりあげられている。Oldenburg (1989) でも提唱する地域コミュニティの衰退もあいまって、個人の自由感覚が低下したとし、その原因として日常生活が、職場と家庭を行き来するだけの「2 拠点モデル (two-stop model)」になっていることを指摘している。もちろん近代社会においてもサードプレイスに位置づけられるパブや居酒屋などは存在したが、そこは飲酒する場所、現実逃避の場所という社会認識が強く、交流の場としての意義は重視されてこなかったとしている。そこで Oldenburg & Brissett (1982) は「家庭の外、仕事場の外に存在する、人々が主に互いの付き合いを楽しむために集まる場所」、「住民にとってアクセスしやすい公共の場であり、住民によって自分たちのものとして利用されている場所」として、サードプレイス概念を提唱しているのである⁴⁾。

Oldenburg & Brissett (1982) においてサードプレイスは、遊びや喜びの

3) Oldenburg (1989) については、松本 (2017a) にてレビューしている。

4) Oldenburg & Brissett (1982), pp. 269-270.

ための純粋な社交のためのアソシエーションであるとしている。その上で彼らは、サードプレイスでは（主に仕事生活においての）外面的な地位や主張を切り離すこと、誰もが平等に接し、「サードプレイス言語（third place language）」という会話スタイルで交流することが求められるとしている。

サードプレイスに参加するメリットとして Oldenburg & Brissett (1982) は、目新しさや多様性をもたらすことをあげている。職場や家庭はとても狭くて予測可能な世界を提供するのに対し、サードプレイスでは予期せぬこと、予測不可能な事象が起こる、偶然の出会いや交流が生まれることを指摘している。職場や家庭に対する不平不満などの感情を表現できる場所であることを指摘している。もう1つは異なるパースペクティブの提供である。職場や家庭から離れ、客観的にそれらを見たり、話したりすることで、個人のパースペクティブや精神的なバランスを取り戻すことができるとしている。

Oldenburg & Brissett (1982) は、次の Oldenburg (1989) につながる萌芽であるといえるが、そこではより職場（第1の場所）、家庭（第2の場所）に続く「第3の場所」という視点を強く持っているといえる。いくつかの具体的な形態も例示されているが、特に精神的な不安定さや自分らしさの喪失といった病理に対する処方箋という意味合いも強い。この主張をより具体化し、サードプレイス概念を精緻化したのが Oldenburg (1989) であるといえる。

Oldenburg (1989) は、アメリカの近代化と郊外への移住が促進された結果、「インフォーマルな公共生活」といわれる、仕事や家庭とは別の、地域住民の会話によってくつろぎや安らぎを得る場がなくなってしまったと指摘する。ストレスへの対処が個人の自己責任に転嫁され、大量消費によってその解決が図られるような社会へ転換されてしまった結果、仕事生活においても仕事とプライベートの区別が曖昧になってきていると指摘しているのである⁵⁾。その上でその解決においては、家庭、仕事、そして「広く社会的な、コミュニティの基盤を提供すると共にそのコミュニティを謳歌する場」とい

5) Oldenburg (1989: 邦訳)、49-56ページ。

う3つの経験の領域のバランスがとれていなければならないと主張する。そのような「インフォーマルな公共生活の中核的環境」として、Oldenburg (1989) は「サードプレイス」の概念を提示しているのである⁶⁾。

Oldenburg (1989) はサードプレイスの特徴についてまとめている。それは(1)中立の領域である、(2)人を平等にする、(3)会話が主な活動である、(4)たいいてい近所にあり、利用しやすい、(5)常連がいる、(6)雰囲気遊び心がある、である。順に説明すると、(1)中立の領域というのは、職場でも家庭でもないところを意味する。Oldenburg (1989) はサードプレイスを「家庭と仕事から逃れられる安らぎの場」と見なすだけでは不十分だが、対比のきっかけになるという意味はあるとしている。サードプレイスは文字通り「第三の場所」であり、その存在意義は職場と家庭と比較することで明らかになる。「わたしたちは自分の一番好きな仲間から逃れることが大いに必要」という言説は、サードプレイスを考える以外でも注目値する⁷⁾。

(2) 人を平等にするというのは、サードプレイスでは職場や家庭などの関係や世俗の地位から切り離され、誰でも平等になれ、誰でも受け入れられるということの意味する。これは実践共同体に重要な意味をもたらす。すなわちこの特徴が学習を促進すると考えられるからである⁸⁾。(3) 会話が主な活動である、について Oldenburg (1989) は、サードプレイスでは会話が促進されるためにルールを守ることが求められ、それが実行できない人は毛嫌いされるといった形での暗黙のルールがあるとしている。実践共同体ではファシリテーションやコーディネーターのマネジメントという形でそれが構築されるが、参加者はそれを参加によって習得する必要があるのである⁹⁾。(4) たいいてい近所にあり、利用しやすいというのは、そこに行けば誰かと話ができるという目的で通いやすいということである。(5) 常連がいるについて Oldenburg (1989) は、サードプレイスに特色を与える存在であるとして

6) Oldenburg (1989: 邦訳)、56-63ページ。

7) Oldenburg (1989: 邦訳)、66-67ページ。

8) Oldenburg (1989: 邦訳)、69-73ページ。

9) Oldenburg (1989: 邦訳)、84-88ページ。

いる。新参者にとって常連の存在は閉鎖的に感じられるが、そこに仲間入りするという周辺の参加のプロセスが必要である。(6) 雰囲気遊び心があるというのは、サードプレイスでは楽しい雰囲気を意味しているが、それはもう一度職場や家庭と対比させることでその意味が浮かび上がってくる。実践共同体に求められるのはそのほどよい遊び心である¹⁰⁾。以上あげた特徴は、実践共同体を特徴付ける上でも非常に有効である。Oldenburg (1989) はサードプレイスを「生来の知恵を磨く本物の錬成所」と表現している。学習の役割を大きくしながらもサードプレイスの特徴を保持している存在を、実践共同体と考えるべきであろう。

Oldenburg (1989) はサードプレイスから個人が受ける恩恵について、(1) 目新しさ、(2) 人生観、(3) 心の強壮剤、(4) 社交性のパラドックス、の4つの言葉を使って述べている。順に説明すると、(1) 目新しさは日常における刺激というような意味と捉えられる。仕事や家庭の中で自制的効いた生活を送る中で、そこから得られる刺激は少なく、味気ない人格の形成につながるという。サードプレイスは多種多様な人々が集うこと、会話の内容が変化に富んでいること、人々の会話能力が高いことから、常に刺激があるのである¹¹⁾。(2) 人生観について Oldenburg (1989) は、現代の生活環境の中では人生観は容易にゆがめられてしまうとする。サードプレイスでの会話はそれを正常に戻すことができるとしている。不満や不安を解消し、人生の不条理に対するアドバイスをする。特にサードプレイスでの会話で、家庭と同じく仕事に対して行われるものでは、人生経験豊かなサードプレイスの住人の集合知からのアドバイスがよくなされ、ユーモアによって異なる視点をもたらされるという¹²⁾。仕事にかんしていえば実践共同体のキャリア促進機能に比するものが得られると考えられる。(3) 心の強壮剤は居心地の良さによって集う人々を元気にすることであり、(4) 社交性のパラドックスは、社交場の

10) Oldenburg (1989 : 邦訳)、90-92ページ。

11) Oldenburg (1989 : 邦訳)、99-105ページ。

12) Oldenburg (1989 : 邦訳)、106-114ページ。

関係を結ぶ相手から自己を護らなくてはならないこと、すなわち職場に幼なじみの友人を乱入させてはならないが、友人関係を維持する自由も重要である、ということである。サードプレイスは社交性のパラドックスを解消する装置であるとともに、一人ずつでは友人になれなくても、そこに集う人々をひとまとまりに考えることで友人関係を広げることができるのである¹³⁾。

さらに Oldenburg (1989) は、サードプレイスがたんなる会話の場にとどまらない機能を有していると主張する。たとえば政治運動の基盤となったり、政治家と市民をつなぐ場であったりという機能をアメリカでは伝統的にサードプレイスが果たしてきたとし、そしてそれは失われつつあると指摘している。このような機能はサードプレイスに人がなげなく集まる会合の習慣によって作用する¹⁴⁾。またサードプレイスはコミュニティにおける監視機能を果たしたり、家庭生活の問題発生を未然に防ぐ機能を果たしたりすると指摘する¹⁵⁾。Oldenburg (1989) はサードプレイスが「正しく機能すれば」コミュニティの中で一定の役割を果たすことができると主張しているが、この点は実践共同体にとっても示唆深い。サードプレイスの特性をある程度備えた実践共同体は、正しく機能すれば学習を促進するといえるからである。そして Oldenburg (1989) の指摘するような議論の促進、ネットワークの連結、相互監視、個人的問題へのケアといった機能は、実践共同体にも適用可能と考えるからである。

Oldenburg (1989) の提唱するサードプレイスは、実践共同体とどのような関係にあるのか。実践共同体の定義 (Wenger et al., 2002) やその構成要素の考察 (松本、2014) から考えると、サードプレイスは実践共同体の上位概念とも考えることができる。サードプレイスは学習以外の活動もできるしそれが主要な活動であるが、学習の場にすることもできる。しかしサードプレイスは学習を目的にする共同体ではないので、両者を同じものにするこ

13) Oldenburg (1989: 邦訳)、123-130ページ。

14) Oldenburg (1989: 邦訳)、132-141ページ。

15) Oldenburg (1989: 邦訳)、145-155ページ。

はできない。しかし Oldenburg (1989) の考えるサードプレイスの個人が受ける恩恵を、実践共同体では得られないかといわれるとそうではない。むしろこの点こそが従来の実践共同体の議論に不足している点である。Wenger et al. (2002) が実践共同体をアイデンティティの拠り所 (home of identity) としているように、共同体のメンバーから安らぎや刺激を得るという意味合いは少なからずある。そして市川 (2001) の指摘するように、関係志向的な学習意欲も影響するからである。

もう1つ、Oldenburg (1989) の指摘するサードプレイスの特徴は、実践共同体における学習を促進する要素としても考えることができる。特に (1) 中立の領域である、(2) 人を平等にする、という点である。組織における上下関係などから解放されることは、Edmondson (2012) の提唱する学習を促進する要素の1つ、「心理的安全」を高める。(6) 雰囲気遊び心がある、についても同様である。そして (3) 会話が主な活動である、(5) 常連がいる、といった特徴は、活発な相互作用を可能にするであろう。

実践共同体を見る上での Wenger et al. (2002) の提唱した次元に従ってサードプレイスと比較すると下表のようになる。

表1 サードプレイスと実践共同体の比較

| 次元 | サードプレイス | 実践共同体 |
|-----|----------------|--------------------|
| 目的 | やすらぎ・刺激 | 学習・交流 |
| 規模 | 数人から十数人 | 数人から数百人 |
| 寿命 | 基本的に長期 | 短期から長期 (学習の継続性による) |
| 場所 | 固定、同じ場所にある | 柔軟、分散していてもよい |
| 同質性 | 同質 (主要メンバーは固定) | 同質・異質どちらもある |
| 頻度 | 頻繁 (毎日) | 頻繁ではない (週1~月1) |
| 境界 | 越えない | 越える |
| 自発性 | 自発的 | 自発的あるいは意図的 |
| 制度化 | されていない | されることもある |

Ⅲ サードプレイスの先行研究の検討

Oldenberg のサードプレイス概念について振り返ったところで、ここからはサードプレイスにかんする近年の先行研究についてみていく。サードプレイスはどのように研究されているのであろうか。

1. サードプレイスの研究方法

実践共同体と同様（松本、2017b）、サードプレイス概念も定性的研究が多い。特に多いのは事例研究であり、今回レビューした論文の5分の3を占める。多くは単一の研究対象を深く調査した単一事例研究であるが、Oldenburg（1989）が各国の主なサードプレイスとされるパブやカフェ、居酒屋などを調査しているように、複数国のサードプレイスを比較した Wessendorf & Farrer（2021）のような研究もある。またその国特有のサードプレイスについて、グローバルな視点から検討する研究、例えばイラン（Daneshyar, 2018）、インドネシア（Handarkho et al., 2021）、マレーシア（Tan & Lee, 2022）、オーストラリア（Cantillon & Baker, 2022）、中国（Nguyen, 2019）、サウジアラビア（Nahiduzzaman et al., 2020）、ブラジル（Morgado et al., 2022）、南アフリカ（Goosen & Cilliers, 2020）といった国の研究もみられる。そして個人レベルでインタビュー調査を用いた定性的研究もみられる。事例を構成するためのインタビュー調査（たとえば Fong et al., 2021; North et al., 2022）のほか、ライフヒストリー分析（Hooper et al., 2015）、参加観察（Meshram & O’Cass, 2013; Alexander, 2019; Mimouin & Gruen, 2021）といった手法も用いられている。定量研究は通常の仮説検証型統計分析（Joo, 2020; Tu et al., 2020）や、調査用の尺度作成（Langlais & Vaux, 2022）といった研究は少ないものの、公表されているジオグラフィックデータを用いた研究は多くみられる（たとえば Jeffres et al., 2009; Gilleard et al., 2007）。またオンラインでのサードプレイスを調査するため、人々の移動データを用いた分析（Adelfio et al., 2020; Borsellino et al., 2021）、ウェブサイト閲覧データ分析

(Fang & Slaper, 2022)、SNS のログ分析 (McArthur & White, 2016; Vaux & Langlais, 2021; Gachado et al., 2021) といった研究手法もみられる。

そして文献レビューをもとに概念検討を行う研究もある (たとえば Yuen & Johnson, 2017)。

2. サードプレイス研究の事例研究

(1) サードプレイス事例研究の種類

本論文のためにレビューしたサードプレイス研究で最も多いのは事例研究であった。ただその方法はいくつかの種類に分けることができる。

まずは「発見型」の研究である。これは Oldenburg (Oldenburg & Brissett, 1982; Oldenburg, 1989) のサードプレイス概念をもとに、たとえば学会 (Purnell & Breede, 2018)、コミュニティガーデン (Dolley, 2020)、カーリングクラブ (Mair, 2009)、図書館 (Lin et al., 2015; Degkwitz, 2020; Wood, 2021; Thiele & Klagge, 2021;)、書店 (Nguyen et al., 2019)、難民コミュニティ (Biglin, 2021)、喫茶店・カフェ (Daneshyar, 2018)、パブ・居酒屋 (Wessendorf & Farrer, 2021; Cabras & Mount, 2017)、避難者コミュニティ (Matsumoto, 2018)、ファストフード店 (Cheang, 2002)、野外教育グループ (North et al., 2021) といった研究をあげることができる。これらのうち、研究対象の特性や活動などの描写から、研究対象をサードプレイスであるとみなすことができる、という類いの研究は、たんにサードプレイス概念をあてはめているだけになっていることもあり、有意義な示唆をもたらす大きな発見にはつながらないものも多い。しかし今回上記のように、図書館をサードプレイスとして活用しようとする研究が多かったが、これらはむしろサードプレイスに図書館があてはまるというより、図書館をサードプレイス化していくという意図をもった研究群である。同様に特定のコミュニティやグループそれ自体、あるいはその中にサードプレイスを構築することを提唱する研究もある。これらの研究に特徴的なのは、サードプレイス概念のメリットを研究対象に見出すか、そのメリットを取り入れるためにサードプレイス

概念を取り入れ・構築することを提唱することである。そのことでのちに触れる、サードプレイスの成果を獲得することができる。

次の事例研究のパターンは「機能探求型」ともいえるもので、これは前項でもふれた、Oldenburg (Oldenburg & Brissett, 1982; Oldenburg, 1989) のサードプレイス概念のもたらすメリットの他に、サードプレイスがもたらす機能を探求していこうという研究群である。たとえば生産性向上 (Minoun & Gruen, 2021)、購買促進 (Alexander, 2019)、社会的アイデンティティの安定化 (Fong et al., 2021)、家庭支援 (Vaux & Asay, 2019)、ソーシャルサポートの確保 (Rosenbaum et al., 2007; Peters, 2016)、子どもの発達支援 (Hooper et al., 2015; Fujiwara et al., 2020)、がん患者のケア (Wakelin & Street, 2015; Rosenbaum & Smallwood, 2013; Glover & Parry, 2009)、多様性尊重機運の醸成 (Littman, 2022; Hanks et al., 2020)、災害復興支援 (Matsumoto, 2018)、学習促進 (Aldosemani et al., 2016; Meredith et al., 2021) といった機能が提唱されている。機能探求型の実例研究の特徴は、サードプレイス概念の役割と可能性を拡張し、より多くの機能をもつべきである、というニーズが背景にあるということである。

そしてもう1つの類型は「概念検討型」である。これはサードプレイス概念を再検討することを目的にしており、その検討の材料として事例を用いて考察するというものである。これについては項を改めて後述する。

(2) オンラインでのサードプレイス

当然ながら Oldenburg (1989) は、オンラインでのサードプレイスについては想定していない。しかしオンラインでの実践共同体があるのと同様、サードプレイスもオンライン上で成立すると考えるのは、自然の流れになっている。

特徴としてあげられるのは、第1に商用サービスであってもそのままサードプレイスとして位置づけていることである。たとえば Facebook (Vaux & Langlais, 2021)、セカンドライフ (Berezowska, 2021)、Twitter チャット

(McArthur & White, 2016)、仮想空間 (Moore et al., 2009)、ニュースサイト (Robinson & Deshano, 2011)、オンライン学習環境 (Aldosemani et al., 2016)、多人数参加型オンラインゲーム (Steinkuehler & Williams, 2006) などがそれにあたる。第2にサードプレイスとしての活動あるいは実践は、オンラインでの交流が主となっていることである。もちろんその場を成立させるための実践(ゲームをやったり、ニュースを投稿したり、学習活動をしたり)は行っているが、交流以上の実践を行っている事例は少ない。その意味ではオンラインという形態ではあるものの、従来型のサードプレイスとして機能していると考えてよいであろう。

(3) コミュニティ・都市におけるサードプレイス

(1)の記述と重複する箇所もあるが、本論文のためにレビューしたサードプレイス研究では、コミュニティおよび都市におけるサードプレイスの重要性について指摘する研究が多く、この分野で一定の研究蓄積があることがわかる。たとえば都市政策 (Besson, 2021; Jeffres et al., 2009; Purnell, 2019)、貧困の改善 (Hickman, 2013)、福祉施策 (Finlay et al., 2019)、難民施策 (Biglin, 2021)、家族支援施策 (Vaux & Asay, 2019; Hooper et al., 2015)、中間都市の位置づけ (Adelfio et al., 2020)、社会の持続可能性 (Goosen & Cilliers, 2020; Thompson, 2018)、多様性支援 (Littman, 2022)、教育改革 (Gachago et al., 2021; Aldosemani et al., 2016)、社会参加支援 (Thiele & Klagge, 2021; Wright, 2012)、文化施策 (Cantillon & Baker, 2022; Luo et al., 2016)、流通促進 (Gagne, 2011)、といった目的のもとで、コミュニティや都市においてサードプレイスを構築することを提唱している。これらの研究の特徴は、行政サービスの不全に対する対応策という形で提唱されていることである。サードプレイスを構築するだけですべて解決する特效薬としてではなく、既存の行政サービスや課題に対する施策をより効果的にするためのものとしてサードプレイスを用い、その機能をいかそうとするねらいがうかがえる。もう1つの特徴はサードプレイスを用いることで、同じ課題や問題

を抱えた人々を1つの場所に集め、相互交流させること、さらにいえばそこから自律的な解決に導こうとするという考え方である。行政サービスが自治体対個人という図式になるのはやむを得ないが、それは課題や問題を抱えた人々を孤立させることにもつながる。サードプレイスはそのような人々を1カ所に集めることを可能にする。そして課題や問題を共有することで、孤独感を解消することにつながる。これはサードプレイスの機能の1つである。そこから次の展開として、集まった人々が自発的に問題を解決したり、より多くの人々を集めて相互作用するという形になることも考えられる。このような展開は、本論文の検討するテーマの1つ、「サードプレイスの実践共同体化」ということができるであろう。

(4) 高齢化社会におけるサードプレイス

(1) の記述と重複する箇所もあるが、本論文のためにレビューしたサードプレイス研究では、サードプレイスを高齢化社会に対する1つの処方箋として研究するものが多くみられた。高齢者消費の増大 (Meshram & O’Cass, 2014; 2018)、生活への満足度増大 (Tan et al., 2022; Cheang, 2002; Hutchinson & Gallant, 2016)、サービスへの満足度増大 (Lee et al., 2017)、社会的アイデンティティの安定化 (Fong et al., 2021)、ソーシャルサポートの確保 (Rosenbaum et al., 2007; Littman, 2021)、幸福度 (Tu et al., 2020; Gilleard et al., 2007; Campbell, 2015) といった目的を果たすべく、サードプレイスが用いられている。このような研究の特徴は、前項にあるような行政サービスや地域コミュニティの補完的役割という使われ方もあるが、企業による活用の事例もある。まず企業にとってはサードプレイスのメリットを享受するために用いるわけであるが、その性質上、無料で出入り自由にするのは難しい。介護施設等で用いる場合は、その施設内にサードプレイスを構築し、利用者には便益があるようにマネジメントするという方法になる。あるいは研究者が事例の中で、実践例としてサードプレイスを事例の中に見出すという形をとることもある。

そして高齢者対象の研究が多くなる背景として、高齢者がサードプレイスの機能で解決できるような、生活に対する楽しみ、安心感、包摂感、交流や居場所の獲得といった課題をもちやすいということである。高齢者のこれらの問題は、病気や犯罪や貧困といった問題に比べると深刻度は相対的に低いものの、問題を深刻化する遠因になりうる問題である。サードプレイスは高齢者の交流を通じてこれらの遠因となる問題を解決することが可能であり、その可能性に着目した研究が多くなるのは当然といえよう。

3. サードプレイス研究の関連変数

(1) サードプレイス研究の成果変数

次にみていくのは、サードプレイス研究が何を成果変数として設定しているのかということである。

まずは Oldenburg (1989) がサードプレイスのメリットとして提唱していた事項、あるいはそれに類する変数である。当然であるがこれらをサードプレイスの成果変数に置いている研究は多い。たとえば、安心・リラックス (Purnell & Breede, 2018)、楽しさ・社会性 (Yuen & Johnson, 2017; Mair, 2009; Hutchinson & Gallant, 2016)、自由の感覚 (Berezowska, 2021)、愛着・包摂性・居場所感 (Dolley, 2020; Joo, 2020; Lin et al., 2015; Meshram & O'Cass, 2013; Wood, 2021; Gilleard et al., 2007; Nahiduzzaman et al., 2020; Rania et al., 2022)、交流の機会 (Hickman, 2013; Daneshyar, 2018; Matsumoto, 2018; Alidoust et al., 2019; Peters, 2016; Cabras & Mount, 2017; Steinkuehler & Williams, 2006)、といった変数である。これらは最終的な成果として設定される場合もあれば、これによって例えば先述の行政やコミュニティの課題解決という成果に対しての先行変数として用いられることもある。

次に個人レベル・集団レベルの変数である。サードプレイスに所属・参加する個人や集団が知覚する変数をサードプレイスの成果変数として用いる研究もある。たとえばウェルビーイング (Hooper et al., 2015; Finlay et al., 2019; Alidoust et al., 2019; Cantillon & Baker, 2022)、社会的アイデンティ

ティの安定化 (Fong et al., 2021)、ホスピタリティ (Sandiford, 2019)、自己実現 (Parkinson et al., 2022; Robinson & Deshano, 2011)、感情的ケア (Wake-lin & Street, 2015)、自己肯定感・自尊心向上 (Littman, 2022; Fujiwara et al., 2020)、QOL 向上 (Rosenbaum & Smallwood, 2013; Glover & Parry, 2009)、といったものである。これらの変数は Oldenburg (1989) のメリットの代理的な変数として用いられていることもあれば、それらを經由して最終的な成果変数として設定されていることもある。心理学・組織論で蓄積のある成果変数を用いることは重要であるといえよう。

最後にサードプレイスの機能を拡張する形で設定した成果変数である。たとえば知識共有 (Purnell & Breede, 2018; Lin et al., 2015)、生産性向上 (Minnoun & Gruen, 2021)、消費意欲向上 (Alexander, 2019; Hanks et al., 2020)、起業促進 (Fang & Slaper, 2022)、教育支援 (Meredith et al., 2021; North et al., 2022)、といった変数は、サードプレイスの本来の機能からずいぶん拡張されることで実現されるものであるといえる。これはサードプレイス概念のさらなる可能性とともに、概念の拡張必要性を指摘している研究であるといえる。

(2) サードプレイスの先行変数

次にサードプレイス研究において、その構築や運営の先行要因となっている変数について、どのようなものが用いられているであろうか。

まず先にあげておくのは、オンライン環境・仮想コンテキストについてである (Vaux & Langlais, 2021; Langlais & Vaux, 2022; Borsellino et al., 2021; McArthur & White, 2016; Soukup, 2006; Moore et al., 2009; Aldosemani et al., 2016)。これらはいずれもオンラインでのサードプレイスの研究であり、そこで当然ながら、オンライン環境を準備すること、およびその運営に必要な資源を用いることをあげている。

それらを除いた研究の中では、サードプレイスの先行変数として、大きく2つに分けられる。1つはサードプレイスの特性である。たとえば、個性化

(識別性・認知性、外からみてそれとわかる程度：Mehta, 2010; Handarkho et al., 2021)、アクセス・オープン性 (Adelfio et al., 2020; Degkwitz, 2020; Alidoust et al., 2019)、公平性 (Parkinson et al., 2022)、社会的密度 (参加人数の多さ：Parkinson et al., 2022; Moore et al., 2009; North et al., 2022)、活動資源 (Moore et al., 2009)、といったものである。これらはサードプレイスの構築・運営において促進要因になり得る。

もう1つはサードプレイスにおける人的交流にかんする変数である。たとえば、交流への意思 (Parkinson et al., 2022; Lee et al., 2017)、コミュニケーション (Joo, 2020)、支援欲求 (サードプレイス内外の他者を支援したいという気持ち：Rosenbaum, 2006)、交流の規範 (Wessendorf & Farrer, 2021; Peters, 2016; Purnell, 2019)、ソーシャルキャピタル (Meshram & O’Cass, 2013; 2018;)、メンバーの多様性 (Yuen & Johnson, 2017)、といったものがあげられていた。サードプレイスにおける人的交流に際して、これらの要因に配慮することが重要であるといえる。

(3) サードプレイスの阻害要因

そしてサードプレイスの円滑な構築・運営を阻害する要因についてもまとめておく。研究の中ではたとえば、参加者と運営側の衝突 (Minoun & Gruen, 2021)、既存のメンバーとの衝突 (Hickman, 2013)、参加規範の影響 (Fong et al., 2021; Wessendorf & Farrer, 2021; Aldosemani et al., 2016)、サポートの欠如 (Parkinson et al., 2021; Hutchinson & Gallant, 2016)、現実社会との乖離感 (Moore et al., 2009; Robinson & Deshano, 2011)、といった参加者の交流を阻害する要因と、サードプレイスとしての認識の欠如 (Lin et al., 2015)、社会的偏見 (Littman, 2022)、行政の排除 (Purnell, 2019)、環境の不安定さ (Littman, 2021)、資源の不足 (Hutchinson & Gallant, 2016)、といったサードプレイスをとりまく外部環境にかんする要因に大別することができる。山 (2021) も指摘する、参加者の交流を促進するためのサポートやファシリテーションが重要であることはいうまでもないが、外的環境の影響は見

落としがちな問題である。行政や地域コミュニティと良好な関係をつくるよう留意することが重要であるとしている。

4. サードプレイス概念の拡張にかんする研究

これまでサードプレイスの先行研究についてみてきたが、その中で少なからぬ数の研究が、サードプレイス概念を再検討する必要があるとして、概念の拡張を提唱している。

なぜ概念の拡張を検討しなくてはならないのか、それにはいくつかの理由がある。第1に、その概念の前提が、アメリカ社会におけるソーシャルネットワークの衰退という限られた範囲の理論になっているというのがある。これまで見てきたように、研究者の国や地域のローカルなサードプレイスをみていくことで、サードプレイス概念の検討を試みる研究も多かったが、それは理論の前提が当てはまらないからであるといえる。日本の文脈ですでにサードプレイス概念の再検討を行っている研究として、モラスキー（2014）がある。彼は居酒屋をサードプレイスとして位置づけるにあたり、日本の文脈を考慮し、「自宅ではないが自宅のように気楽な場所」として、家の近くになくてもいいといった問い直しを行っている。その他スナック（谷口ほか、2017）、ファストフード店（中嶋、2020）、モーニング喫茶店（島村、2003）といった他の業態でも、日本の文脈を加味した検討が行われている。

そしてその中でも独自の視点をもつ研究としてあげられるのが南後（2018）の「ひとり空間」研究である。駅の近くにある牛丼チェーン店やカプセルホテル、「ひとりカラオケ」店などの業態は、「一定の時間、ひとりの状態が匿名性のもとで確保された空間」であり、それが自宅でも職場・学校でもない「第3の場所」として自分らしくいられる場所であると指摘している。Oldenburg（1989）がサードプレイスの最大の特徴としている、気のあう仲間との何気ない会話がここでは成立しない。しかし同時に安らぎ・安心感を得られる場所でもある。南後（2018）もまた日本の都市論の文脈に立脚し、サードプレイス概念を問い直す重要な研究である。

概念の拡張を検討する理由の第2に、ITの発展がある。これはこれまで見てきたとおりであり、オンラインでのサードプレイスを検討する必要があるということである。1点付け加えるなら、オンラインでの対話や交流をしながらも、人は自宅等で1人で安らぎや安心感を得ている。南後(2018)の「ひとり空間」とオンラインでのサードプレイスは両立するのであり、それがオンラインでのサードプレイスを成立させる要件にもなっているのかもしれない。

概念拡張の第3の理由は、交流以外にもできる可能性があるということである。先述の通り、知識共有(Purnell & Breede, 2018; Lin et al., 2015)、生産性向上(Minoun & Gruen, 2021)、消費意欲向上(Alexander, 2019; Hanks et al., 2020)、起業促進(Fang & Slaper, 2022)、教育支援(Meredith et al., 2021; North et al., 2022)、という具合に、サードプレイスをその機能をより生産的に用いようとする研究は多い。そこから概念をその目的に即した形で再検討しようという考え方になる。

そして第4に、概念が単純すぎるという点である。知識創造における「場」の理論がその高い重要性に比して研究が発展しないのと同様に、サードプレイス概念もまた、多様な概念を包摂しうるシンプルさによって、Oldenburg(1989)の換骨奪胎研究を多数生み出す可能性がある。そこからサードプレイス概念の精緻化を試みる研究が出てきている。たとえば概念の次元の提示(Yuen & Johnson, 2017; Borsellino et al., 2021; Mehta & Bosson, 2010; Parkinson et al., 2022)、測定尺度の検討(Joo, 2020; Langlais & Vaux, 2022)、第1、2の場所との相対性の検討(Biglin, 2021; Rosenbaum et al., 2007; Adelfio et al., 2020; Littman, 2021)といった研究である。

加えて、概念の精緻化を試みるため、概念の再分類を行う研究もある。たとえばMinoun & Gruen(2021)は、カスタマーワーカー(サードプレイスとしてカフェなどで仕事あるいは勉強で利用する人々)との関係性について検討し、サードプレイスの経営側にとっては、重要な顧客とみなされるか、回転率を悪くするなど大きな脅威とみなされるかの2つの視点があるとし

ている。その上でサードプレイスを、従来型、妥協型、現状維持型、生産型の4種類に分け、顧客のニーズに対応する形でサードプレイスを柔軟に適応させることを提唱している。普遍的な類型ではないが、環境に応じた柔軟性をもつことを指摘しているといえる。また小林・山田（2014）は、先述の南後（2018）のように交流目的ではなく1人でも居心地のよいサードプレイスを「マイプレイス型」と定義し、交流を意図した「交流型」と区別している。同時に小林・山田（2015）ではマイプレイス型から交流型への移行可能性を検討している。

そして石山（2021）は、従来の交流を目的としたサードプレイス概念を「伝統的サードプレイス」と位置づけ、マイプレイス型を「演出された商業的サードプレイス」、斜行以外の目的をもったサードプレイスを「テーマ型サードプレイス」、オンラインでのサードプレイスを「バーチャルサードプレイス」と分類している。この石山（2021）の分類は第3の拡張理由にもつながる重要な分類であり、実際に石山ほか（2019）では、地域活性化の鍵概念として用いている。

5. サードプレイスと実践共同体との関連性

以上のようにサードプレイスの先行研究について検討してきた。サードプレイス概念は今後の発展可能性を十分にもった概念であるといえる。しかし同時に、その概念のシンプルさが、逆に発展を阻害するという可能性も考えられる。その将来を左右する概念として本論文では実践共同体を用いることを提唱する。

実践共同体は「あるテーマにかんする関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を、持続的な相互交流を通じて深めていく人々の集団」（Wenger et al., 2002）であるとし、企業組織との文脈を考慮すれば、「その成員の学習を促進するため、あるいは知識を共有・創造するため、あるいは組織の境界を越えて人々と相互作用するために、企業内外で一定のテーマのもとに構築される共同体」（松本、2019）である、一言で言えば「学習のた

めのコミュニティ」である。松本（2019）において実践共同体は「学習の『第三の場所』」であると指摘しているが、サードプレイスが職場・学校（第1の場所）、自宅（第2の場所）に続く第3の場所であるのに対し、実践共同体は「個人が学びたいこと」「組織が学ばせたいこと」のミスマッチを解消するための学習のためのコミュニティであると位置づけている。つまりその空間性よりも学習という目的において定義される概念であるとしているのである。

しかしこれまで実践共同体研究は、学術研究としての概念の精緻化を優先するあまり、幾分自由度の低い概念とみなされているかもしれない。次節では両者の関係性について議論し、概念的架橋を試みたい。

IV 考察

前節までサードプレイス研究のレビューを行い、その流れと研究の意義について整理してきた。本節では実践共同体概念との関係性を議論したい。

1. サードプレイス概念の展望

サードプレイス研究が今後も発展していくために重要なポイントをいくつか指摘しておきたい。第1に先ほど議論した、概念の精緻化の必要性である。多くの研究がその必要性を指摘しており、過度に包摂的な概念のまま用いることは、研究の発展によい影響はもたらさないであろう。

第2に、サードプレイス概念の分析モデルの検討である。今回みてきたように、サードプレイスの構築・運営から、メンバーの交流促進・リラックスや安心感の獲得といった、基本的なメカニズムを確認するような研究は、すでにその段階ではないということができよう。上記のプロセスをサードプレイスの基本モジュールと考えれば、それをより達成するための先行変数の検討や、基本モジュールからどのような成果変数につながるか、といったより複合的な分析モデルを構築することが求められている。

第3に、サードプレイス概念の発展モデルの検討である。眞保（2022）は

民俗学の視点からサードプレイス概念を検討した上で、小林・山田（2014; 2015）や石山（2021）の研究を念頭に、サードプレイス概念の分類を行った上で、それらが静態的な存在としてではなく、互いに移行し合うような動態的な存在として捉えることを提唱している。本論文では次項で検討するように、サードプレイスから実践共同体への移行モデルを提唱するが、それによってサードプレイスはより多様な目的を達成するための概念として用いることができると考えられる。

第4に、上記と関連して、サードプレイスの目的の発展である。サードプレイスの長所は気軽に構築して誰でも気楽に参加できる点であるといえる。そして交流によるリラックスや安心感、居場所感の獲得といったメリットを享受できる。高齢者対象の研究のように、それが1つの目的として継続することも可能である。しかしそこから別の目的に寄与できるとメンバーが感じた場合、サードプレイスの目的も、そしてそれに伴ってサードプレイス自体も発展していく、そのための道筋を考える必要がある。たとえば地域の人々の交流の場としてサードプレイスが構築され、それを維持してもかまわないが、もしそこから地域活性化プロジェクトの推進の場として発展させたいとメンバーが思った場合、それを押さえつけてはいけないであろう。高齢者のサードプレイスからより広範な集まりと相互扶助への活動へ、貧困問題を抱える人々の集まりから地域の問題解決プロジェクトへ、スポーツチームとしての活動から地域大会の運営へ、集中型学習カリキュラムから世代間継続的学習プロジェクトへ、といったように、その目的が発展する場合、従来のサードプレイスでは対応できないということがないようにしなければならない。そしてもちろん、それがメンバーの総意でない場合、従来通りの「発展させない」という決断をすることも選択肢であり、場合によっては別の道を選ぶことも必要であろう。

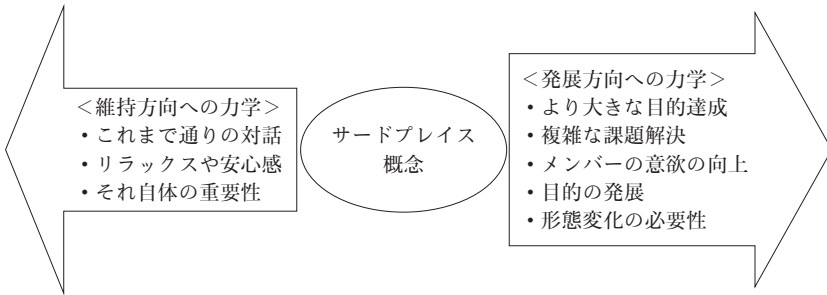
第5に、サードプレイス同士、そしてより大きなコミュニティへの接続可能性の検討である。これまでのサードプレイス概念は、仲間内での気軽な交流という点を重視するあまり、やや同質的で排他的な側面があったと考えら

れる。しかし今後はより大きな目的のために、同様のサードプレイス同士が境界横断により交流することも必要になる。またサードプレイスがより大きな地域コミュニティや行政区画、企業や組織に埋め込まれた存在であれば、それらとの相互作用は不可欠である。その成否がサードプレイスの発展、およびその目的の達成を促進するか、阻害するかを決めることになる。

最後に、サードプレイスがよりオープンで気軽に参加できるようにしながら、交流を深めていくための、マネジメントの重要性である。これまでのサードプレイス概念は、仲間内で自律的に、かつなげない対話を通じて運営されてきた。しかしそのことが同質的な排他性を生み出すことにもつながりかねない。特に特定の目的を持ったサードプレイスを構築する場合、伝統的な同質的なサードプレイスや、他者に干渉しないマイプレイス型のサードプレイスでは、ゆくゆくは目的達成には不向きになるであろう。それには先述のサードプレイス形態の発展と共に、よりオープンなサードプレイスにふさわしいマネジメントが求められる。

このようにサードプレイス概念の発展について議論してきた。つまりサードプレイス概念は、一方でこれまで通り、限られた範囲のメンバーが同質的に集まり、他愛のない会話で安心感、リラックス、居場所感を享受するという存在であり続けることもできるし、そのニーズは社会の変化と共に、以前として強くある。しかし他方でサードプレイス概念は、上記の「基本モジュール」のもつ機能を多様に活用することで、さらに多くの問題を解決したり、多くの目的を達成したりするという可能性をもっている。地域や行政の課題、社会課題、持続可能性問題、教育問題、そして企業活動の支援といった、多様な目的を達成する原動力、コア概念として用いることができる。それにはこれまで通りの基本モジュールを達成するだけの概念を発展させる必要がある。現在サードプレイス概念は、この「維持・発展トレードオフ」を抱えている存在であるといえる。そしてこのトレードオフは、やや発展方向への力学が強く働いている。最初は伝統的なサードプレイスであっても、その可能性ゆえに、そのままではいられなくなっているといえる（図1）。

図1 サードプレイス概念の維持・発展トレードオフ



2. 実践共同体とサードプレイスの架橋について

前項において、今後のサードプレイス研究、および概念の発展について論点を整理した。サードプレイス概念は研究の発展のため、またその活用可能性の追求のためには、今まで通りではいられなくなってきているのである。

ここからは実践共同体とサードプレイスの両概念の架橋について考えてみたい。結論からいえば、サードプレイスは発展方向の1つとしての「実践共同体化」を志向することができるし、実践共同体はサードプレイスをその「潜在段階」の1つの形態として位置づけることができるということである。

(1) サードプレイスの「実践共同体化」

まずサードプレイスの「実践共同体化」についてである。実践共同体研究から考えると、サードプレイスは基本モジュールの機能を発揮する概念とし、目的を持った活動は実践共同体に発展させて行えばよいと考える。これを本論文では「実践共同体発展モデル」と呼ぶことにするが、これを採用するメリットは、上記の維持・発展トレードオフに由来する。つまりサードプレイスのメンバーは、サードプレイスを発展させてより意義のある課題解決や目的達成を行いたいと考えているが、他方で今まで通りの居場所でもあってほしいと考えているということである。

その上でトレードオフの解消方法は2つある。すなわち発展させた形態

(サードプレイスか実践共同体)のマネジメントを通じて、活動と居場所感を両立させるか、実践共同体を新たに構築し、そこにおいて実践による課題解決や目的達成を行い、他方で別に居場所としてのサードプレイスを残す、ということである。前者はマネジメント対象が1つでよいし、従来の形態をそのまま移行できるが、両立させるマネジメントは難しい。後者は対象を分割することになるが、居場所としての存在を残すことができる。後述するが、本論文では気軽な参加の促進という長所を活用することができるという点で、分割案を支持したい。たとえば地域のサードプレイスから地域活性化プロジェクトを発足させる際は、サードプレイスから実践共同体を発足、あるいは発展させプロジェクトの実践にあたるということである。どちらの方法を採用するにしても、発展モデルはメンバーの意思を尊重し、活性化プロジェクトに参加しない人をサードプレイスのメンバーとして継続させることができる。他方で活性化プロジェクトを実践する実践共同体の成員も、居場所としてのサードプレイスに多重所属することができる。

そしてサードプレイスを実践共同体化する理由は、実践共同体は一定のテーマ(=領域)のもとで共同体を作り、実践を通じて学ぶという点において、実績的にも研究的にも蓄積があるということである。テーマも企業間イノベーション(長山、2012)、個人のキャリア確立(荒木、2021)、組織内外の学習促進(松本、2019)など多岐にわたる。これを活用しない手はないと考えられる。

(2) サードプレイスを実践共同体の一形態として活用

松本(2019)において実践共同体を学習の「第3の場所」として位置づけたのには、サードプレイスのもつ基本モジュールの機能を組み込みたいという思いがあった。もともと実践共同体は、多様なレベルのメンバーの参加を奨励し(Wenger et al., 2002)、参加・不参加、所属の程度を成員が決めることができる(Wenger, 1998)。そして成員の実践共同体への正統的周辺参加を通じて学習が達成される(Lave & Wenger, 1991)と主張してきた。実践

共同体はアイデンティティの居場所（Home of Identity）であり、仕事を離れて学習したいことに仲間と向き合うことが出来る場所として考えられてきた（Wenger et al., 2002）。しかし概念の精緻化を目的にしているとはいえ、その目的を学習方向に限定することは、知識による権威化、同質性に基づく排他性を生み出す要因となる危険性をもつ（Roberts, 2006）。そして実践共同体はテーマに関心のある人々を参加させることは得意でも、「関心のない人々」を巻き込むことは苦手になっている（松本, 2020; Matsumoto, 2022; Matsumoto et al., 2022）。

実践共同体はより多くの人々を巻き込むため、サードプレイスを活用する必要がある。その方法は第1に、定期・非定期的にサードプレイスを構築し、実践共同体への関心をもってもらう入り口の役割を果たすことである。松本（2019）におけるイベント・交流型実践共同体にも近いイメージである。第2は、実践共同体の初期段階をサードプレイスとして位置づけることである。具体的にはWenger et al.（2002）の5段階の「潜在」段階について、サードプレイスとして位置づけ、多様なメンバーに気軽に参加してもらうことである。いずれは実践共同体としての領域・共同体・実践に参加してもらうことが重要であるが、サードプレイスのもつ強みをいかす発想である。「関心のない人々」をどう巻き込むかという問題に対する1つの処方箋といえる。

このように実践共同体とサードプレイスは、共通する次元も多く、両者は組み合わせることで発展できると考えられるのである。

V おわりに

本論文では、サードプレイス概念の先行研究を検討し、あわせて実践共同体との架橋を試みた。サードプレイス研究は発展の可能性を十分に秘めているが、概念の拡張の必要性があると考えられる。「維持・発展トレードオフ」を乗り越えるためには、実践共同体との架橋が有効な方法であるといえる。

その上でサードプレイス研究を実践共同体に連携させて行うことは、有効

な方向性であると確認できた。今後は本論文で示した両者の連携についての研究を進めていく。

(筆者は関西学院大学商学部教授)

参考文献

- Adelfio, M., Serrano-Estrada, L., Martí-Ciriquián, P., Kain, J., & Stenberg, J. (2020). Social activity in gothenburg's intermediate city: Mapping third places through social media data. *Applied Spatial Analysis and Policy*, 13(4): 985-1017. DOI: 10.1007/s12061-020-09338-3.
- Aldosemani, T. I., Shepherd, C. E., Gashim, I., & Dousay, T. (2016). Developing third places to foster sense of community in online instruction. *British Journal of Educational Technology*, 47(6): 1020-1031. DOI: 10.1111/bjet.12315.
- Alexander, B. (2019). Commercial, social and experiential convergence: fashion's third places. *Journal of Services Marketing*, 33(3): 257-272. DOI: 10.1108/JSM-04-2018-0116.
- Alidoust, S., Bosman, C., & Holden, G. (2019). Planning for healthy ageing: How the use of third places contributes to the social health of older populations. *Ageing & Society*, 39(7): 1459-1484. DOI: 10.1017/S0144686X18000065.
- 荒木淳子 (2021). 『企業で働く個人の主体的なキャリア形成を支える学習環境—職場、実践共同体、越境』東京：晃洋書房。
- Biglin, J. (2021). Photovoice accounts of third places: Refugee and asylum seeker populations' experiences of therapeutic space. *Health & Place*, 71. DOI: 10.1016/j.healthplace.2021.102663.
- Borsellino, R., Charles-Edwards, E. & Corcoran, J. A. (2021). Toolkit for measuring visitation in third places. *Applied Spatial Analysis and Policy*, 14(3): 547-562. DOI: 10.1007/s12061-020-09372-1.
- Cabras, I., & Mount, M. P. (2017). How third places foster and shape community cohesion, economic development and social capital: The case of pubs in rural Ireland. *Journal of Rural Studies*, 55: 71-82. DOI: 10.1016/j.jrurstud.2017.07.013.
- Campbell, N. M. (2015). Third place characteristics in planned retirement community social spaces. *Journal of Architectural and Planning Research*, 32(1): 55-67. DOI: 10.1111/joid.12035.
- Cantillon, Z and Baker, S. (2022). DIY heritage institutions as third places: Caring, community and wellbeing among volunteers at the Australian Jazz Museum. *Leisure Science*, 44(2): 221-239. DOI: 10.1080/01490400.2018.1518173.
- Cheang, M. (2002). Older adults' frequent visits to a fast-food restaurant: Nonobligatory social interaction and the significance of play in a "third place". *Journal of Aging Studies*, 16(3): 303-321. DOI: 10.1016/S0890-4065(02)00052-X.
- Daneshyar, E. (2018). Tea houses as third places in MASulih's vernacular settlement. *Open*

- House International*, 43(2): 49-59. DOI: 10.1108/OHI-02-2018-B0008.
- Dolley, J. (2020). Community gardens as third places. *Geographical Research*, 58(2): 141-153. DOI: 10.1111/1745-5871.12395.
- Edmondson, A. C. (2012). *Teaming: how organizations learn, innovate, and compete in the knowledge economy*. San Francisco: Jossey-Bass. (野津智子訳 [2014]. 『チームが機能するとはどういうことか: 「学習力」と「実行力」を高める実践アプローチ』東京: 英治出版。)
- Fang, L. & Slaper, T. (2022). Nowcasting entrepreneurship: Urban third place versus the creative class. *Sustainability*, 14(2). DOI: 10.3390/su14020763.
- Finlay, J., Esposito, M., Kim, M. H., Gomez-Lopez, I., & Clarke, P. (2019). Closure of 'third places'? Exploring potential consequences for collective health and wellbeing. *Health & Place*, 60. DOI: 10.1016/j.healthplace.2019.102225.
- Fong, P., Haslam, C., Cruwys, T. & Haslam, S. A. (2020). "There's a bit of a ripple-effect": A social identity perspective on the role of third-places and aging in place. *Environment and Behavior*, 53(5): 540-568. DOI: 10.1177/0013916520947109.
- Fujiwara, T., Doi, S., Isumi, A., & Ochi, M. (2020). Association of existence of third places and role model on suicide risk among adolescent in Japan: Results from A-CHILD study. *Frontiers in psychiatry*, 11. DOI: 10.3389/fpsyt.2020.529818.
- Gachago, D., Cruz, L., Belfor, C., Livingston, C., Morkel, J., Patnaik, S., & Swartz, B. (2021). Third places: Cultivating mobile communities of practice in the global south. *International Journal for Academic Development*, 26(3): 335-346. DOI: 10.1080/1360144X.2021.1955363.
- Gagne, N. O. (2011). Eating local in a US city: Reconstructing "community"-a third place-in a global neoliberal economy. *American Ethnologist*, 38(2): 281-293. DOI: 10.1111/j.1548-1425.2011.01306.x.
- Gilleard, C; Hyde, M and Higgs, P. (2007). The impact of age, place, aging in place, and attachment to place on the well-being of the over 50s in England. *Research on Aging*, 29(6): 590-605. DOI: 10.1177/0164027507305730.
- Glover, T. D., & Parry, D. C. (2009). A third place in the everyday lives of people living with cancer: Functions of Gilda's Club of Greater Toronto. *Health & Place*, 15(1): 97-106. DOI: 10.1016/j.healthplace.2008.02.007.
- Goosen, Z., & Cilliers, E. J. (2020). Enhancing social sustainability through the planning of third places: A theory-based framework. *Social Indicators Research*, 150(3): 835-866. DOI: 10.1007/s11205-020-02350-7.
- Handarkho, Y. D., Khaerunnisa, K., & Michelle, B. (2021). Factors affecting the intentions of youngsters in switching to a virtual third place amidst the COVID-19 pandemic: The place attachment and push-pull mooring theory. *Global Knowledge Memory and Communication*. DOI: 10.1108/GKMC-06-2021-0105.
- Hanks, L., Zhang, L., & Line, N. (2020). Perceived similarity in third places: Understanding

- the effect of place attachment. *International Journal of Hospitality Management*, 86. DOI: 10.1016/j.ijhm.2020.102455.
- Hickman, P. (2013). "Third places" and social interaction in deprived neighbourhoods in Great Britain. *Journal of Housing and the Built Environment*, 28(2): 221-23. DOI: 10.1007/s10901-012-9306-5.
- Hooper, C. M., Ivory, V. C., & Fougere, G. (2015). Childhood neighbourhoods as third places: Developing durable skills and preferences that enhance wellbeing in adulthood. *Health & Place*, 34: 34-45. DOI: 10.1016/j.healthplace.2015.03.017.
- Hutchinson, S. L., & Gallant, K. A. (2016). Can Senior Centres be Contexts for Aging in Third Places? *Journal of Leisure Research*, 48(1): 50-68. DOI: 10.18666/jlr-2016-v48-i1-6263.
- 市川伸一 (2001). 『学ぶ意欲の心理学』東京：PHP 研究所。
- 石山恒貴 (編著)・北川佳寿美・片岡亜紀子・谷口ちさ・山田仁子・岸田泰則・佐野有利 (2019). 『地域とゆるくつながろう！サードプレイスと関係人口の時代』静岡：静岡新聞社。
- 石山恒貴 (2021). 「サードプレイス概念の拡張の検討—サービス供給主体としてのサードプレイスの可能性と課題」『日本労働研究雑誌』第732号、4-17ページ。
- Jeffers, L. W., Bracken, C. C., Jian, G. & Casey, M. F. (2009). The impact of third places on community quality of life. *Applied Research in Quality of Life*, 4(4): 333-345. DOI: 10.1007/s11482-009-9084-8.
- Joo, J. (2020). Customers' psychological ownership toward the third place. *Service Business*, 14(3): 333-360. DOI: 10.1007/s11628-020-00418-5.
- 小林重人・山田広明 (2014). 「マイプレイス志向と交流志向が共存するサードプレイス形成モデルの研究：石川県能美市の非常設型『ひよっこりカフェ』を事例として」『地域活性研究』第5巻、3-12ページ。
- 小林重人・山田広明 (2015). 「サードプレイスにおける経験がもたらす地域愛着と協力意向の形成」『地域活性研究』第6巻、1-10ページ。
- Langlais, M & Vaux, D. E. (2022). Establishing and testing a quantitative measure for evolving third-place characteristics. *International Journal of Technology and Human Interaction*, 18(1). DOI: 10.4018/IJTHI.293201.
- Lave, J. and Wenger, E. (1991). *Situated cognition: legitimate peripheral participation*. Cambridge: Cambridge University Press. (佐伯胖訳 [1993]. 『状況に埋め込まれた認知：正統的周辺参加』東京：産業図書。)
- Lee, J. E., & Severt, D. (2017). The role of hospitality service quality in third places for the elderly: An exploratory study. *Cornell Hospitality Quarterly*, 58(2): 214-221. DOI: 10.1177/1938965516686110.
- Lin, H., Pang, N., & Luyt, B. (2015). Is the library a third place for young people? *Journal of Librarianship and information Science*, 47(2): 145-155. DOI: 10.1177/0961000614532303.
- Littman, D. M. (2021). Third place theory and social work: Considering collapsed places.

- Journal of Social Work*, 21(5): 1225-1242. DOI: 10.1177/1468017320949445.
- Littman, D. M. (2022). Third places, social capital, and sense of community as mechanisms of adaptive responding for young people who experience social marginalization. *American Journal of Community Psychology*, 69(3-4): 436-450. DOI: 10.1002/ajcp.12531.
- Luo, Q. J. Wang, J., & Yun, W. J. (2016). From lost space to third place: The visitor's perspective. *Tourism Management*, 57: 106-117. DOI: 10.1016/j.tourman.2016.05.012.
- Mair, H. (2009). Club life: Third place and shared leisure in rural Canada. *Leisure Science*, 31(5): 450-465. DOI: 10.1080/01490400903199740.
- Matsumoto, M. (2018). Formation of third place by evacuees from nuclear accident: Case study of wide area residents' association of Tomioka Town, Futaba County, Fukushima Prefecture. *Journal of Disaster Research*, 13(6): 1142-1156. DOI: 10.20965/jdr.2018.p1142.
- 松本雄一 (2017a). 「コミュニティ、サードプレイス、ラーニング・コミュニティと実践共同体」 関西学院大学『商学論究』第64巻第2号、323-391ページ。
- 松本雄一 (2017b). 「実践共同体を扱った先行研究の検討」 関西学院大学『商学論究』第65巻第1号、1-80ページ。
- 松本雄一 (2018b). 「実践共同体構築による学習促進の事例研究—非規範的視点と越境を中心に—」『日本経営学会誌』第41号、52-63ページ。
- 松本雄一 (2019). 『実践共同体の学習』東京：白桃書房。
- 松本雄一 (2020). 「実学集合型実践共同体の概念的検討」 関西学院大学『商学論究』第67巻第3号、21-59ページ。
- 松本雄一 (2021). 「学習におけるサードプレイスの重要性」『日本労働研究雑誌』第732号、1ページ。
- Matsumoto, Y., Kasamatsu, H., & Sakakibara, M. (2022). Challenges in forming transdisciplinary communities of practice for solving environmental problems in developing countries. *World Futures*, DOI: 10.1080/02604027.2021.2012878.
- Matsumoto, Y. (2022). Discovery of transdisciplinary knowledge creation through communities of practice: Case study of “municipal meister” institutions. *The proceedings for the EGOS Colloquium 2022*, sub-theme 44.
- McArthur, J. A., & White, A. F. (2016). Twitter chats as third places: conceptualizing a digital gathering site. *Social Media + Society*, 2(3). DOI: 10.1177/2056305116665857.
- Mehta, V and Bosson, J, K. (2010). Third places and the social life of streets. *Environment and Behavior*, 42(6): 779-805. DOI: 10.1177/0013916509344677.
- Meredith, C; Heslop, P and Dodds, C. (2021). Simulation: social work education in a third place. *Social Work Education*. DOI: 10.1080/02615479.2021.1991908.
- Meshram, K., & O'Cass, A. (2013). Empowering senior citizens via third places: Research driven model development of seniors' empowerment and social engagement in social places. *Journal of Services Marketing*, 27(2): 141-154. DOI: 10.1108/08876041311309261.
- Meshram, K., & O'Cass, A. (2018). Senior citizens' perspective on the value offerings of third

- place via customer to customer (C-2-C) engagement. *Journal of Services Marketing*, 32(2): 175-194. DOI: 10.1108/JSM-08-2014-0269.
- Mimoun, L. & Gruen, A. (2021). Customer work practices and the productive third place. *Journal of Service Research*, 24(4), DOI: 10.1177/10946705211014278.
- Moore, R. J., Gathman, E. C. H., & Ducheneaut, N. (2009). From 3D space to third place: The social life of small virtual spaces. *Human Organization*, 68(2): 230-240. DOI: 10.17730/humo.68.2.q673k16185u68v15.
- マイク・モラスキー (2014). 『日本の居酒屋文化：赤提灯の魅力を探る』東京：光文社。
- 長岡健・橋本論 (2021). 「越境学習、NPO、そして、サードプレイス—学習空間としてのサードプレイスに関する状況論的考察」『日本労働研究雑誌』第732号、31-43ページ。
- 長山宗広 (2012). 『日本のスピノフ・ベンチャー創出論—新しい産業集積と実践コミュニティを事例とする実証研究』東京：同友館。
- Nahiduzzaman, K. M., Aldosary, A., Ahmed, S., Hewage, K., & Sadiq, R. (2020). Urban cohesion vis-a-vis organic spatialization of “Third places” in Saudi Arabia: The need for an alternative planning praxis. *Habitat International*, 105. DOI: 10.1016/j.habitatint.2020.102258.
- 中嶋葉子 (2020). 「サードプレイスを目的としたファストフード店利用とマニュアル化された接客マナーとの関連：若年労働者を対象にした分析」『成城コミュニケーション学研究』第11巻、1-20ページ。
- 南後由和 (2018). 『ひとり空間の都市論』東京：筑摩書房。
- Nguyen, T. V. T., Han, H. Y., Sahito, N., & Lam, T. N. (2019). The bookstore-cafe: emergence of a new lifestyle as a “third place” in Hangzhou, China. *Space and Culture*, 22(2): 216-233. DOI: 10.1177/1206331218795832.
- North, C., Beames, S., Stanton, T., & Chan, B. (2022). The contribution transport time makes to outdoor programs: A third place? *Journal of Experiential Education*, 45(2): 191-208. DOI: 10.1177/10538259211019087.
- Oldenburg, R., & Brissett, D. (1982). The third place. *Qualitative Sociology*, 5, 265-284.
- Oldenburg, R. (1989). *The great good place: cafés, coffee shops, bookstores, bars, hair salons and other hangouts at the heart of a community*. New York: Paragon House. (忠平美幸訳 [2013]. 『サードプレイス：コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』東京：みすず書房。)
- Parkinson, J., Schuster, L., & Mulcahy, R. (2022). Online third places: Supporting well-being through identifying and managing unintended consequences. *Journal of Service Research*, 25(1): 108-125. DOI: 10.1177/10946705211018860.
- Peters, D. M. (2016). Inked: historic African-American beach site as collective memory and group ‘Third Place’ sociability on Martha’s Vineyard. *Leisure Studies*, 35(2): 187-199. DOI: 10.1080/02614367.2014.986506.
- Purnell, D and Breede, D. C. (2018). Traveling the third place: Conferences as third places. *Space and Culture*, 21(4): 512-523. DOI: 10.1177/1206331217741078.

- Purnell, D. (2019). Public parks: Third places or places eliciting moral panic? *Qualitative Inquiry*, 25(6): 531-534. DOI: 10.1177/1077800418806612.
- Rania, N; Coppola, I and Pinna, L. (2022). Social inclusion and exclusion places: the point of view of young adults. *Qualitative Report*, 27(3): 792-815. DOI: 10.46743/2160-3715/2022.5335.
- Roberts, J. (2006). Limits to communities of practice. *Journal of Management Studies*, 43(3), pp. 623-639.
- Robinson, S., & Deshano, C. (2011). Citizen journalists and their third places: What makes people exchange information online (or not)? *Journalism Studies*, 12(5): 642-657. DOI: 10.1080/1461670X.2011.557559.
- Rosenbaum, M. S. (2006). Exploring the social supportive role of third places in consumers' lives. *Journal of Service Research*, 9(1): 59-72. DOI: 10.1177/1094670506289530.
- Rosenbaum, M. S., Ward, J., Walker, B. A. & Ostrom, A. L. (2007). A cup of coffee with a dash of love - An investigation of commercial social support and third-place attachment. *Journal of Service Research*, 10(1): 43-59. DOI: 10.1177/1094670507303011.
- Rosenbaum, M. S., & Smallwood, J. (2013). Cancer resource centers as third places. *Journal of Services Marketing*, 27(6): 472-484. DOI: 10.1108/JSM-10-2011-0147.
- Sandiford, P. J. (2019). The third place as an evolving concept for hospitality researchers and managers. *Journal of Hospitality & Tourism Research*, 43(7): 1092-1111. DOI: 10.1177/1096348019855687.
- 島村恭則 (2003). 「モーニングの都市民俗学」『国立歴史民俗博物館研究報告』第103号、325-348ページ。
- 真保元 (2022). 「民俗学におけるサードプレイス論の可能性」『常民文化』第45号、99-116ページ。
- Soukup, C. (2006). Computer-mediated communication as a virtual third place: Building Oldenburg's great good places on the world wide web. *New Media & Society*, 8(3): 421-440. DOI: 10.1177/1461444806061953.
- Steinkuehler, C., & Williams, D. (2006). Where everybody knows your (screen) name: On-line games as "third places". *Journal of Computer-mediated Communication*, 11(4). DOI: 10.1111/j.1083-6101.2006.00300.x.
- Tan, T. H., & Lee, J. H. (2022). Residential environment, third places and well-being in Malaysian older adults. *Social Indicators Research*, 162(2): 721-738. DOI: 10.1007/s11205-021-02856-8.
- 谷口功一・スナック研究会 (編著) (2017). 『日本の夜の公共圏：スナック研究序説』東京：白水社。
- Thiele, K., & Klage, B. (2021). Third places and educational justice: Public libraries in the context of COVID-19. *ERDKUNDE*, 75(1): 31-49. DOI: 10.3112/erdkunde.2021.01.03.
- Thompson, S. (2018). Exploring the nature of third places and local social ties in high-density

- areas: The case of a large mixed-use complex. *Urban Policy and Research*, 36(3): 304-318. DOI: 10.1080/08111146.2018.1502660.
- Tau, J. C., Lin, K. C., & Chen, H. Y. (2020). Investigating the relationship between the third places and the level of happiness for seniors in taiwan. *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 17(4). DOI: 10.3390/ijerph17041172.
- Vaux, D. E. & Asay, S. M. (2019). Supporting families in crisis: Awareness and use of third places. *Family & Consumer Sciences Research Journal*, 48(1): 22-36. DOI: 10.1111/fcsr.12325.
- Vaux, D. E. & Langlais, M. R. (2021). An update of third place theory: Evolving third place characteristics represented in Facebook. *International Journal of Technology and Human Interaction*, 17(4): 117-130. DOI: 10.4018/IJTHI.2021100107.
- Wakelin, K., & Street, A. F. (2015). An online expressive writing group for people affected by cancer: A virtual third place. *Australian social work*, 68(2): 198-211. DOI: 10.1080/0312407X.2014.991336.
- Wenger, E. (1998). *Communities of practice: learning, meaning, and identity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wenger, E., McDermott, R. & Snyder, W.M. (2002). *Cultivating communities of practice*. Boston, MA: Harvard Business School Press. (野村恭彦監修, 櫻井祐子訳 [2002]. 『コミュニティ・オブ・プラクティス—ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』東京: 翔泳社。)
- Wessendorf, S., & Farrer, J. (2021). Commonplace and out-of-place diversities in London and Tokyo: Migrant-run eateries as intercultural third places. *Comparative Migration Studies*, 9(1). DOI: 10.1186/s40878-021-00235-3.
- Wood, E. (2021). Libraries full circle: The cross section of community, the public sphere, and third place. *Public Library Quarterly*, 40(2): 144-166. DOI: 10.1080/01616846.2020.1737491.
- Wright, S. (2012). From “third place” to “third space”: Everyday political talk in non-political online spaces. *Javnost-The Public*, 19(3): 5-20. DOI: 10.1080/13183222.2012.11009088.
- 山泰幸 (2021). 「超高齢時代のまちづくり—地域コミュニティと場づくり—」岩本通弥・門田岳久・及川祥平・田村和彦・川松あかり (編) 『民俗学の思考法—〈いま・ここ〉の日常と文化を捉える』東京: 慶應義塾大学出版会、121-132ページ。
- Yuen, F. & Johnson, A. J. (2016). Leisure Spaces, Community, and Third Places. *Leisure Sciences*, 39(3): 295-303. DOI: 10.1080/01490400.2016.1165638.